

豫知するばかりでなく、運勢を決定する裁決者でもあることは、支那流の十干十二支五行による占ひの場合と全く軌を一にする。また、規定の詳細なこと、その占ひの方法の面倒で、その道の専門的技術を要することなども兩者は相いてゐる。(支那流の占ひも全く占星術の一種に他ならない。)そして、この専門的技術によつて施術する所が、見かけ上、例へば現代の醫者が醫學上の知識や技術によつて患者を診断し治療するのと同じ有様なので、施術者も被術者も眞面目な自信と信仰とを以てそれを行ふことになる。施術者は運勢を判断するばかりでなく、悪い運勢を避けたり軽くしたりする方法をも授ける。また、上のやうな意味で占星術は『技術的』である他に、根本が非科學的で、人間の空想を快く誘惑するので、信者は益々、無意識のうちにだまされて了ふ。未來を豫知したいといふ人間本來の切望が、本當の科學的法則に頼るよりも空想と希望と恐怖とに支配されるといふことになるのが、知能の幼稚な段階にふさわしいわけだらう。(續く)

質 疑 應 答

問：仁王經の七難中、日月度を失ひ、時節變逆し、或は赤日出で、黒日出で、二三四五の日出で、或は日蝕して光なく、或は日輪一重、二三四五重輪現すること一の難になす也。二十八宿度を失ひ、金星、彗星、輪星、鬼星、火星、水星、風星、^{まう}斗星、南斗、北斗、五鎮の大星、一切の國主星、三公星、百官星、是の如き諸星各々變現すること二の難となす也。

以上の天文學上の御解説を煩はすものである。(T. M. 生)

答：どうも之は宗教書中の文で、理學書ではないため、正確に、ありのままの事實を述べたものと考へることは出来ません。只、人が昔時から天地宇宙の諸現象を見て、不可思議と思つたもの、又は、想像上から、こんなことも在りそうだと思ふことを擧げたのでせう。勿論、皆、肉眼で天象を見た経験と、其の錯覺や、誤認から來たものです。例へば“日月度を失ひ”といふのも、實は決して太陽や月が軌道から脱線するわけではないのですから、むしろ之れは天氣の亂れたときに日月の光輝が變化することを言つたのでせう。“時節變逆し”も、一重二重乃至五重の日輪も皆氣象學上の變現です。“赤日”は日出日没の景色、“黒日”も天氣の悪い時の異象、又は日蝕です。“二十八宿度を失ひ”も前述と同様。又、金星以下の星々の名も、有名無名いろいろの名で、中には、天界234號373頁の索引で知られるものもありますが、しかし、必ずしも正確な星を指すものではありません。況んや“諸星各々變現する”など言ふのは、決して今の變星などのことを言ふのではなくて、空模様を亂れてゐるときに、雲霧のために星が怪しく見えかくれするのを言ふものに違ひありません。(Y)

窪川一雄君を悼む

The late Mr. Kazuo Kubokawa.

山本一清 *Issei Yamamoto.*

今年ば、我が國の天文學界に於いて、上半年中に三人の専門家を失つた。一月19日に水澤の川崎俊一博士が亡くなり、四月8日に平山清次博士が歿されたが、日付けから言へば此の兩博士の何れよりも先き立つて、一月3日に窪川一雄君が病死された。享年37歳。痛惜の至りである。

窪川君は明治36年岐阜市に生れ、岐阜中學校と第八高等學校とを経て、大正15年三月秋山、秋吉、鐺木、塚本の諸氏と同期に東京帝國大學天文學科を卒業し、直ちに東京天文臺技手となり、昭和13年初め臺灣總督府技師に就任した篤學の士である。東京に在職中、君は及川、(故)木下諸氏等と共に小遊星や彗星等の寫眞觀測を試み、又、皆既日蝕の觀測のため昭和9年二月14日南洋ロソブ島と、昭和11年六月19日北海道紋別へ出張したこともある。その他、月による星の掩蔽、新星や變星等についても若干の觀測効果を擧げた。臺北に移つてからは、主として航空氣象の觀測研究に當つてゐたけれど、尙、純天文學への興味と計畫とを有ち續け、同時に、臺北天文觀測同好會を主裁して、本會支部のために盡力を惜しまなかつた。臺灣は南進日本の基地であるといふ意味に於いても、君の存在は、學術上に、又、天文普及上に重要であつたのに、圖らずも働らき盛りの年輩で逝つたのである。(終)

質 疑 應 答

問：荒木俊馬著“天文學概觀”に、黒點相對數は“孤立黒點及び黒點群の數の十倍と孤立黒點、黒點群の區別なく、あらゆる個々の黒點の總數との和である”と書かれてゐますが、少し意味がわかりかねますので、御説明願ひます。

(大阪生)

答：なる程、一寸ヤヤコシイ文章ですね。實は此うなのです。例へば、太陽面上に次ぎの3群の黒點があるとしします：

第1群(黒點5個)、第2群(黒點8個)、第3群(黒點1個)

この場合の相對數は、

$$3 \times 10 + 5 + 8 + 1 = 44$$

といふ風に計算するのです。(A. C.)